

# 映像作品視聴の経験的研究：

## AV 機器を利用した相互作用分析の適用可能性の検討\*

南 保輔

### 論文要旨

映像作品視聴の相互作用分析を行った。エスノメソドロジー・会話分析を活用しての映像作品視聴の分析は始まったばかりである。関連する論点の紹介後、相互作用分析の例を報告した。

映像作品視聴場面記録の提供を受けて、発話の連鎖組織と宛先の分析を行った。映像作品視聴の発話は、作品についての作品批評と作品内の登場学生による発言についての発言批評とに分かれた。前者は、視聴学生同士を宛先にする発話であった。後者は、視聴学生相互を宛先とするものと、登場学生を宛先とする発言批判とに分けられた。発言批判にたいして、もうひとりの視聴学生からは明示的な同意や不同意は示されなかった。批判ではない発言批評には、大学生活についての評価と聞いて応答がなされるものがあり、もうひとりの学生から明示的な同意があたえられることが多かった。これらの分析を通じて、映像作品視聴研究にたいする相互作用分析の貢献の可能性が示された。

論文第2部では、段階尺度への回答にもとづく量的データは、ある種の帰結として、それを生み出す相互作用プロセスと結びつけて考量されるべきであることを示唆する分析例が提示された。

キーワード：映像作品視聴，視聴者，相互作用分析，評価，発言批判，エスノメソドロジー・会話分析

### 0 映像作品視聴とは

映像作品の視聴は、リュミエール兄弟のシネマトグラフによって映画が見られるようになった19世紀末から始まったといえよう。その経験的な研究は、量的なものが長く主流であったが、近年新しいテクノロジーを活用した媒介観察（南2014）が可能となってきた。本論は、相互作用分析と組み合わせたひとつの試みを紹介する。

映像作品視聴とはどのようなものだろうか。本

論文は、この問題へのアプローチのひとつを提示する。まず第1部において、相互作用分析の適用例を示す。映像作品視聴の媒介観察のやり方のひとつを示すことをねらいとしている。ついで第2部で、量的指標とのつきあわせを試みる。量的データを解釈する資源を相互作用分析を活用して提示することをめざす。

## 第1部 映像作品視聴の相互作用分析

### 1 映像作品視聴の相互作用

テレビを見ているひとたちを映した『ゴグルボックス (Gogglebox)』というイギリスの人気番組がある。その日本版が2016年3月にNHKで放映された。『ごいっしょTV! : ゴグルボックス』という43分の番組である。NHKオンラインの番組紹介には以下のような文章があった。

世界30か国で話題沸騰の人気番組がニッポン初上陸。テレビを見る人たちを見るテレビ。登場するのは、(略)。直近に放送された人気番組や話題のニュースを見ながら、泣いたり笑ったり言い合いしたり…お茶の間のリアルな人間ドラマ。いろんな番組をいろんなお茶の間を通して、「いっしょに」味わう、初めてのTV体験(2016年8月13日確認)。<sup>1)</sup>

家族や友人同士といった8組が家庭などで「テレビを見」ているところが映される。「泣いたり笑ったり言い合いしたり」が繰り返される。映像作品を視聴しながら、複数人間が相互作用している様子が記録されている。

映像視聴は単独で行われることも多い。だが、本研究においては2人(以上)が共在して映像視聴する場面を取り上げる。その理由は大きく2つある。ひとつは、「社会」を作り上げる「最小」単位が2人の共在だからである(Goffman 1963; 1974)。そしてもうひとつは、単独視聴での発言を収集しようとする場合、そのかたちは「独り言」といったやや不自然なものとなるか、脳波計をつけるといった日常離れしたものとなるからである。

2人(以上)による視聴ということ、「相互作用」ということばを本論では使う。「interaction」の訳語である。このことばは、「相互作用」や「交互作用」と訳されて使われている領域もあるが、ひととひとのみならず、ひととのやりとりも含むことができる点からこの日本語を採用する。また、視聴「行動」や視聴「行為」、視聴「活動」といった特定も考えられるが、とりあえずはそういった特定は行わない。使用する必要が生じたときには、「活動」ということばを使うことにする。

家庭という私的空間での撮影というデータ収集は通常困難なものである。本論が取り上げるのは大学の研究室において授業の一環として実施された、2人の学生AとBによる映像作品視聴である。データ収集の手順を以下に説明しておこう。

成城大学文芸学部マスコミュニケーション学科の半期の授業のひとつで、学生は映像作品制作と視聴行動調査を行っている。<sup>2)</sup> まず、学生は大学紹介を目的とした映像作品を制作する。5人以上が登場し長さ3分程度を要件としている。NHKの『あなたが主演50ボイス』という番組がある。あるテーマ(お題)についての50人の回答をつないだものである。これにならって『成城10ボイス』というタイトルをつけている。優秀作品をひとつ選んで受験生向けのオープンキャンパスで上映することにしていた。

授業の後半では、制作した映像作品を2人の学生に視聴してもらい、それを録画して分析する。Mac用のアプリケーションにiShowU HDというスクリーンキャプチャソフトがある。画面に出力されている映像のほかに、USB接続をした外部カメラの映像も同時に取りこむことができる。録音機能も備わっている。ただし、作品の音声出力の音量が大きく、視聴している2人の声は鮮明



図1 分析対象視聴セッションの1場面のキャプチャー

に録音することはできない。そのために、別途ICレコーダを使用している。

視聴学生は、作品視聴後に段階尺度を用いた質問紙で作品の評価を行う（付図1参照）。<sup>3)</sup>これを2つの作品について繰り返したあと、インタビューで全般的な感想を回答する。その一方、作品視聴の際には、感じたことなどをできるだけ発言するようにとの指示が与えられた。

本論では、映像作品を制作した学生と視聴した2人の学生の承諾が得られた視聴セッションのものをデータとしている。映像作品制作者の学生Cは2年生（学年は当時のもの、以下同）であり、視聴した学生AとBは3年生である。2人は、最初に学生C制作の「作品C」を、つぎにほかの履修学生Dの「作品D」を視聴した。録画された視聴セッションの長さは13分32秒である。図1はその1場面である。iMac画面のキャプチャーだが、左上が視聴している映像作品である。右上の小さな画面の2人が視聴学生である。左の女子学

生がA、右の男子学生がBである。作品画面ではちょうど学生Bが登場している。

この視聴セッションは、ほかの学生のものと比較していくつか特異な点がある。まず第1に、この視聴セッションがやり直しのもので、視聴の2人にとって2度目の視聴である。キャプチャソフトかICレコーダの操作のいずれかに不備があり、1度目のセッションではデータがうまく収集できなかった。ちなみに、そのときに視聴したのは作品Cと、もうひとつは作品D以外の別の作品だった。第2は、学生AとBが、前年度にこの授業を履修したということがある。映像作品制作と映像視聴調査を自分たちも経験している。そのために、視聴しながら発話するというのに慣れてるように思われた。また、自身の映像作品制作経験が視聴時の発話の基盤となっているようでもあった。<sup>4)</sup>なお、履修学生の多くは通常、自身と同じ2年生に視聴を依頼することが多い。

第3に、ある事情から学生Aが学生Cの支援者

として作品登場学生5人全員に出演協力依頼を行ったことがある。そのために、作品Cに登場する5人全員がマスコミュニケーション学科の3年生であった。視聴の学生Bが5人のうちのひとりとして登場している。そして第4に、学生AとBは3年生のこのときに南演習の履修生であった。マスコミュニケーション学科の3年演習の授業は一種のプレミナールであり、その関係で学生Aに学生Cの支援を依頼することになった。本研究用のデータ利用の承諾が得られたのには、このような事情が大きい。

以上の4点から、本論が検討するデータには代表性があるとは言いがたい。しかし、映像視聴の録画とその相互作用分析という新しい試みの具体例を示し、今後の研究の可能性を展望するものとしては有効なものと考えられる。

## 2 相互作用分析

相互作用分析とは、エスノメソドロジー・会話分析の知見と方法を援用して、相互作用について記述し分析を行うものである。西阪(1997)は「相互行為分析」としているが、本論では、「相互作用分析」ということばを使う。

エスノメソドロジーの分析の原則として、FrancisとHesterは以下の4つがあるという。

- 1 社会的な記述のレリヴァンスをはっきりと示すこと
- 2 メンバーの指向と理解がもたらす帰結性に注意を払うこと
- 3 トークと行為が状況に埋め込まれているという点に注意を払うこと
- 4 データが点検できること  
(Francis & Hester 2004: 28 = 2014: 51.  
訳は少し変更している.)

概略的に述べると、エスノメソドロジーが「メンバー」という行為者本人の経験をなによりも重視していることが原則1と2に現れている。原則3の「トーク」の重視は、社会的相互作用が言語を介して行われているという認識に基盤がある。

原則4のひとつのかたちが、発話のトランスクリプト(抜粋)使用である。このことの含意を見るまえに、西阪の「相互行為分析のねらい」についての議論を見ておこう。西阪は、「社会の成員自身にとっての社会秩序に近づく」ためには、「記述に徹」することが必要だという(1997: 34-35)。

ある相互行為の秩序が、相互行為の具体的進行のなかで、またその具体的進行をとおして、その時々相互行為上の偶然的条件に依存しながら、いかに組織されているか、を記述していこう。(西阪 1997: 35)

そして、「必要な手段」としてトランスクリプトがあるという。

わたしは、成員自身によって社会秩序がそのつどその場その場で(「局所的に」)編み出されていく様子を、実際に示してみせようとしているだけである。このことで、なにか仮説を「実証」しようとしているのではない。むしろ、成員自身にとっての社会秩序について一定の感覚(センス)をえることが目指されているのだ。トランスクリプトは、そのための、あくまでも補助的な、しかし必要な手段である。(西阪 1997: 37)

トランスクリプトは、FrancisとHesterが言うところの、「点検できる(inspectable)」データであり、トランスクリプトづくりは、相互作用分析

の重要な1ステップである。

データが点検できることという第4の原則は、研究者に以下のことを求める。すなわち、メンバーにとっての現象やメンバーの方法が、何らかの形でトークのなかに見て取れるかどうかを、読者が点検できるようにすることである。(Francis & Hester 2004 = 2014: 55-56)

トランスクリプトづくりとその分析について、Heathたちのもの(Heath et al. 2010)では、2つの要点リストが掲載されている。この教科書では分析については2つの章が割かれているが、最初の章は「ビデオを分析すること：予備的観察を発展させること(Analysing Video: Developing Preliminary Observation)」というタイトルである。

#### 要点リスト1 ヴィデオを分析すること：予備的観察を発展させること

- 1 データのシンプルなカタログをつくると、鍵となる出来事や活動を特定するためにまず最初に使用することができる。後に分析的関心が浮かび上がってきたときに、それらと関連するデータ断片を引き出すための基礎とすることができる。
- 2 トランスクリプトづくりは、分析において決定的に重要な意味をもつひとつの資源である。そのおかげで、調査者はデータについてより詳しくなり、予備的な観察や洞察を発展させることができる。
- 3 どんな行為にたいしても、「なぜそれがいまなのか」を問う価値がある。すなわち、その行為が、先行するふるまいに対してどのように関心を向けているか、そして、そ

の後の行為において他の参加者によってどのように取り扱われているかを問うのである。

- 4 諸行為のあいだの関係で顕在化していないものの解きほぐしを、連鎖組織を注意深く見ることで行うことができる。連鎖組織は、行為間の関係の産出と理解可能性をもたらしているのだから。
- 5 対象となるものの候補である実践や連鎖、現象のコレクションは、異なる機会と異なる環境においてその特徴と組織を比較対象するのに貴重なものである。(Heath et al. 2010: 84)<sup>5)</sup>

続く章は、「文脈という事柄：オブジェクト、参加、制度的実践(Matters of Context: Objects, Participation, and Institutional Practice)」というタイトルである。

#### 要点リスト2 文脈という事柄：オブジェクト、参加、制度的実践

- 1 文脈の諸特性は、参加者たちの行為と相互作用において・それらを通じて構成されている。
- 2 部分的には、行為が意味と意義を獲得するのは、その環境の特定の特性との関係のおかげである。
- 3 ジェスチャーや発話のターン、あるいはコンピュータ使用のデザインがその流れのなかでどのようにかたちづくられるかを、その場にいる他者のふるまいと関連づけて吟味するのが有用なことである。
- 4 断片のトランスクリプトづくりでは、出来事を知覚できる範囲にいるすべての参加者のふるまいと、そこでの活動に関連する道

具やシステム, そのほかのオブジェクト使用とに対して繊細であるべきである.

- 5 制度における相互作用の諸側面は, インフォーマルな会話とは異なるデザインをされることが多い. 関係しているワーク独自の要請や特徴をさらに理解するためには, これらの違いを解きほぐすことが有用である.
- 6 フィールドでの観察やそのほかの素材を利用することが必要かもしれないが, 個別具体的な活動を実践として達成するときに, 参加者自身がどのようにして分析の記述において喚起されている特性に志向しているかを示すことが必須である.

(Heath et al. 2010: 108)<sup>5)</sup>

これら2つのリストは, 西阪が言う「成員自身によって社会秩序がそのつどその場その場で(「局所的に」)編み出されていく様子」を理解して示していくために留意すべき事柄である. 本論の相互作用分析も, これらのリストに従って進められる.

### 3 映像作品視聴の発話

本節では, 映像作品視聴場面録画データの相互作用分析結果を提示する. 映像作品を複数の人が見るときに生じるのは, 「泣いたり笑ったり言い合いしたり」とさまざまである. データを収集した授業においては, 学生自身が制作した映像がどのように受けとめられるか, その評価が主たる関心であった. そのために, 本節の分析においても映像作品に直接関わるものと映像作品内での発言等に触発されたものとの焦点を当てる.

2人の視聴学生のやりとりは, その内容が作品についてのものと登場学生の発言についてのもの

表1 映像作品視聴の発話

	トピック	宛先 (address)
作品批評	作品	相手の視聴学生
発言批評	登場学生の発言	相手の視聴学生 発言した登場学生
評価批評	同上	
発言批判	同上	

を分けることができた. 前者を作品批評, 後者を発言批評と呼ぶ. さらに, 後者は, 相手のもうひとりの視聴学生を宛先としているものと, 発言者である登場学生を宛先としているものとに分けられた. 発言批評のうち登場学生を宛先とするものを, 発言批判と呼ぶことにする(表1).

#### 3-1 作品批評

作品批評は作品についての発話の総称だが, そのうち映像作品を評価する作品評価は, 授業課題としてまず一番に知りたいことである. 2人の視聴学生は視聴セッションが始まって早々に明示的な作品評価を行った(抜粋1).<sup>6)</sup>

##### 抜粋1 「かっこよくない, さいしょ」

- 01 P: (《地球儀上で東京が光って消える》)
- 02 A: おお
- 03 (2.0)
- 04 A: すご [い]
- 05 B: [これ(あれ)かなグーグルマッ
- 06 プかな]
- 07 A: hhh
- 08 P: (《澤柳胸像; 校舎; 字幕; 音楽》)
- 09 ➡ A: かっこよくない. [さいしょ]
- 10 ➡ B: [ね.]
- 11 P: (《学生E》)
- 12 A: [うわ ]Eちゃん hhh
- 13 B: [えいぞ]
- 14 (.)

15 → B：映像きれいだよね [(なんか) ]ね：

16 → A： [ん. きれい]

抜粋1は、学生Aと学生Bにとって2度目となる作品C視聴の冒頭である。ここでは、「かっこいい」と「映像きれい」という2つの評価が、学生AとBによってそれぞれ提示され、相手の学生によって同意されている。

ここで、「かっこよくない. さいしょ」(学生Aの09行の矢印)と「映像きれいだよね」(学生Bの15行の矢印)という2つの「評価」が独立になされていると考えることもできそうだが、そうではなく一連の評価活動ととらえることにしたい。それは、学生Bによる2つ目の評価が最初の評価に同意し、かつこれを特定するものと聞くことができるからである。

その理由のひとつは、「さいしょ」という評価対象の指示表現である(09行)。これは映像作品の「最初」の部分(オープニング)ということである。作品Cでは、まず最初に地球儀が映しだされ、それがすこし回転して日本列島が現れたところで東京にあたる地点が光る。そしてつぎに、成城大学のキャンパス各所が短いカットで映し出される。学生Aは地球儀カットを見て「すごい」と言っている(04行)。このことから、「さいしょ」は地球儀カットだけ指すとも考えられる。その一方、発話した時点までのキャンパス各所のカットも含めたものとも考えることができる。キャンパスカットの後には、登場学生を紹介するカットに切り替わる。学生Eが最初に登場し、学生Aの「うわ」(12行)はキャンパスカットから登場学生カットに切り替わったことへの驚きを示すものであるようだ。つまり、学生Bの「映像」(13行と15行)は、学生Aの「さいしょ」と同じ部分のものを指していると考えることができる。

一連の評価活動とする2つ目の理由は、「映像」は「さいしょ」の部分の映像と音声という評価可能な(少なくとも)2側面のうちのひとつを特定しているということがある。「最初の部分がかっこいい」という学生Aの09行の評価では、「どこが」かっこいいのかが特定されていない。学生Bの「映像きれい」はこの点を特定している。

アセスメントについての会話分析を行ったPomerantz(1984)は、最初のアセスメントに続く2つめのアセスメントはそのグレードがアップされるということを見いだした。たとえば、「かっこいい」を「すごくかっこいい」に、「きれい」を「とてもきれい」といったようにである。ここでは、そのようなアップグレードは見られない。評価のグレードとしては同等なものと思われる。だが、学生Aの最初的评价にたいして学生Bは「ね」と短く同意した(10行)が、それだけでは不十分と感じて、側面を特定して自身の言葉で同等の評価を生み出していると見ることができる。<sup>7)</sup>

このデータに見られた作品批評は、抜粋1のほか以下に以下の6つであった。

#### 作品批評のリスト

- ・音声聞き取りやすいね(B)
- ・顔切れてたねいま(A)
- ・こうゆう系多くないなんか(B)
- ・NG集多いね(A)
- ・質問項目おんなじようなかんじだったよね けっこう(B)
- ・NG集好き(A)

「音声聞き取りやすい」(抜粋2の05行の矢印)は「映像きれい」という評価と対をなすものである。音声は映像とならんで映像作品を評価する2大側面である。「顔切れてた」は、あるカットに

ついでの評価である。

残りのうち3つは、作品間の類似点と独自性に関わるものであり、「良し悪し」を直接に述べているものとは言いがたい。「こうゆう系」というのは作品Dのオープニング部分についてのものである。登場学生がそれぞれ「成城10ボイス」と作品タイトルを発言しているカットをつないでオープニングとしている。これも、わりと多く見られるオープニングである。

「NG集」は作品Cと作品D両方のエンディングで使われていた。「多い」と「おんなじようなかんじ」とは、聞きようによってはオリジナリティに欠けて工夫が足りないという否定的な評価をしていると聞くこともできるが、ここでの3つの事例の発話の仕方からは特段そのような否定的な響きは感じられなかった。

好き嫌いは個人的な嗜好の表明である。基本的に作品評価とは言いがたいが、学生Aの「NG集好き」はNG集を見るのが好きであり、作品がそれを使っているということであれしくなったということを示していた。学生Aはこれを、最初に視聴した作品Cのエンディングで発話した。「NG集多いね」という発話は、つぎに視聴した作品Dのエンディングのところであった。

以上、作品視聴時の発話で作品批評と聞くことができるものを検討した。これらは、視聴学生がお互いを宛先 (address) として発話されていた。作品視聴というフレーム (Goffman 1974) がしっかりと維持されているものであった。

### 3-2 発言批評

映像作品をトピックとして作品批評をするほかに、視聴学生は登場人物の発言をトピックとして発言批評を行っていた。つぎにこれを見ていく。

オープンキャンパスで放映される大学紹介とい

う作品の目的から、登場学生の発言は大学生活のある種の「評価」が多かった。視聴学生は、これに同意したりしなかったりということをしていった。これを評価発言の批評、すなわち「評価批評」と呼んで、発言批評のタイプのひとつとして検討する。

#### 抜粋2 「これはおもしろい」

- 01 F: マスコミ特殊講義です。んと、広告と  
02 か出版の業界の:かたが:講義をして  
03 くださるので、すごくおもしろい  
04 [話が聞けるからおすすめです。  
05 → B: [音声聞き取り [やすいよね。  
06 → A: [これはおもしろい。  
07 B: たしかに。

抜粋2は作品Cで「おすすめの授業を教えてください」という問いかけに、登場学生Fが回答している部分である。学生Aは登場学生Fが言い終わるまえに「これはおもしろい」と同意を表明している(06行の矢印)。学生Bは登場学生Fの発言に重複して、「音声聞き取りやすい」という作品評価を発している(05行)が、それが終わったところで「たしかに」と学生Aへの同意を表明する(07行)。

Pomerantzによれば、発言を「アセスメント」と聞いたときには、同意をしなかったりということが生じやすい。そして、同意をすることには、評価するための知識や経験が自分にもあるという主張が含意される(1984)。学生Aの「これは」という指示語(06行)は、「マスコミ特殊講義」という授業を自身も履修したという直接経験を踏まえたものと聞かれる。

登場学生が行う評価を聞くときに、評価対象を自分が経験しているかどうかを学生Aは気にして



すと？」という設問にたいして、登場学生Hが「油断大敵です」と回答した(03行)。これにたいして「おまえいちばん、油断してんじゃねえかよ」と学生Bが反論する(05-06行の矢印)。映像作品中での発言なのだが、それに真っ向から対峙している。このことは、学生Aのふるまいによっても示される。学生Aは笑い声で「たしかに」と同意を示している(07行)。この同意は比較的弱いものであり、必須のものではないように思われる。

同じように登場学生の発言に疑義を呈するものでも、真っ向から反論するのではないやり方もある。それが、自問するというやり方である。

#### 抜粋5 「そんな夢でいいの」

- 01 I : 将来の夢は、ネコと暮らすことです。  
 02 A : ふふ  
 03 ➡ B : (1.0) hそんな夢でいい [の  
 04 A : [hhh

登場学生Iの「将来の夢は、ネコと暮らすことです。」という発言にたいして、学生Aは「ふふ」と笑いで受けとめる(02行)。次の問い(テーマ)を示すカットとなったところで学生Bは「そんな夢でいいの」と発言する(03行の矢印)。学生Aが小さな笑い声で応じた(04行)。

これら2つの事例では、登場学生の個人的側面が話題となっている。登場学生Hにとって「大学生活を一言で表すと」「油断大敵」であり、登場学生Iにとっての「将来の夢は、ネコと暮らすこと」である。学生AとBは登場学生Hと同じ学科で同学年であり、「油断大敵」という自戒を生み出すことにつながった学生Hの失敗経験を知っていたように思われる。そういうこともあって、成城大学に入学してくる将来の学生向けのアドバイ

ス(「大学生活を一言で表すと)」としてではなく、「油断大敵」を意識すべきなのは「おまえ」だどつつこんだのである。

登場学生の発言に疑義を呈し批判するときに、直接に対峙し批判するときと自問するかのように発話することがあった。その違いを生み出すひとつとして、登場学生について個人的な関係があるかどうかということが指摘できた。後者は、登場学生を宛先とせず、学生Aに聞かせるものとして発話がなされた。登場学生の発言に触発された視聴学生2人の発話はこのほかにもいろいろとあった。そのなかで評価と聞かれたものを特に取り上げたが、評価以外のものとして受けとめられる作品触発発話も多くあり、その分析は今後の課題である。

#### 4 映像作品視聴の相互作用分析の可能性

前節で見たように、映像作品視聴と一口で言っても、作品の内容や視聴している状況によってそこで生じる発話にはさまざまなものがある。本研究の分析対象データの場合、親しい友人関係にある大学生が、後輩学生が作成した大学紹介作品を評価する目的で視聴している。その際に見られた、作品についての発話と登場学生の発言についての発話とを検討した。

登場学生の発言について批評する場合、発言を評価と聞いてそれに同意、あるいは不同意するものと、関連する経験がないために同意も不同意もできないと発話する場合があった。評価として聞いて批評する場合は、発話は仲間の学生を宛先としていた一方、発言した登場学生を直接宛先とする発言批判も見られた。

上記の知見は、映像作品視聴がどのようなものであるか、その組織を中心に明らかにするものである。相互作用分析を映像作品視聴に適用するこ

とで、さらなる知見と精緻化が期待される。

## 第2部 映像作品視聴帰結としての量的データ

### 5 視聴経験の量的調査

映像作品をひとはどのように視聴しているのだろうか。この問いは、映画やテレビの誕生とともに制作者や社会科学者の大きな関心となってきた。本論第1部は、この問いにたいする新たなアプローチの可能性を示すものであった。しかしながら、制作者にとってのより大きな関心は量的な側面にある。

第2部では、量的関心にたいする相互作用分析による貢献可能性のひとつを示すことにしたい。本論の立場は、量的データを帰結 (consequences) と捉える立場である。<sup>8)</sup> 映像作品視聴という相互作用のある側面を数値で表現したものと考える。まず、視聴経験の量的調査の問題点を論じ、質的調査の先行例を簡単に紹介する。<sup>9)</sup>

視聴経験の量的側面のひとつの指標として使われてきたのが視聴者数である。映画であれば興行収入や観客動員数、テレビであれば視聴率が作品や番組の価値、経済的価値を示すものとされてきた。

だが、このような量的調査にはさまざまな制約がある。ここでは、ビデオリサーチによるテレビの視聴率調査を念頭に、以下の3つを取り上げる。第1に、番組全体の視聴のみを測定していること。第2に、調査単位が個人ではなかったこと、そして第3に、そもそも「視聴」ではなくて、受信機の「選択」を集計していること、の3つである。

第1の制約は、たいていの場合「視聴率」と言うとき番組全体としてのものであり、ある部分を視

聴者がどのように受けとめているかはほとんど取り上げられないということだ。ただし、毎分のもも算出されてはいる。たとえば、ビデオリサーチの調査で、歴代全局最高世帯視聴率番組は1963年のNHK紅白歌合戦であり(81.4%;ビデオリサーチ社HPより)、そのなかでも最高視聴率の85.3パーセントとなったのは、五月みどりの出演時だったということがわかっている(五月みどり公式サイトより)。

第2の制約として、当初は調査単位が世帯であったということがある。受信機であるテレビがある時点でスイッチが入っているかどうか、入っていればどのチャンネルが選択されているのかを調べるものであった。1997年になってようやく、関東地区でピープルメータが導入されて、個人別の調査が追加的に導入された。

第3の制約として、「ネコが見ていても視聴率」と呼ばれる問題がある。調査されているのはテレビ受信機がどの番組を選択して映し出しているかであり、テレビのまえにだれもおらず、ネコが見ているだけでもカウントされる。ピープルメータの場合、見ているひとが、ボタンを押して自分が見ていることを登録する。押し忘れを知らせるシステムが備えられているということだが、測定の信頼性の問題は残る(NHK 1994)。

上記3つの制約を克服すべく、見ているひとが自己報告する方法で調査しているのがNHKである。「24時間時刻目盛り日記式」と呼ばれる方法である。NHKオンラインの放送文化研究所のウェブサイト調査結果が掲載されているが、調査票を見つけることはできない。NHKが行っている調査で類似したやり方だと思われる生活時間調査の調査票見本は見つけることができた。おそらく、これに類するものだと思われる(NHK放送文化研究所 2016)。ただし、日記式は集計に人

手と手間がかかる。結果が出るまでにかなりの時間を要するという難点がある。

以上、映像作品のひとつとしてテレビを取り上げ、その視聴率調査について見てきた。視聴率調査が対象としているのは、あくまでも人びとが視聴した帰結であり、全体におけるチャンネル選択の分布である。人びとが番組を見る経験そのものに直接アプローチしているとは言いがたいものである。

## 6 映像視聴の質的調査の歴史

視聴者調査 (audience research) において質的調査が行われるようになったのは1980年代に入ってからとされている (Lotz 2000)。アメリカ社会科学に量的研究を導入したのは Paul Lazarsfeld と言うことができるが、かれらのマスコミュニケーション研究の代表作である『パーソナルインフルエンス』が出版されたのは1955年である (Katz & Lazarsfeld 1955)。30年間から40年間は量的研究がマスコミ研究をほぼ独占していたということになる。

Lotz と同じくエスノグラフィ調査を推進する Seiter (2004) は、量的調査について以下の批判をしている。

マスコミュニケーションの調査者たちは、文脈においてメディアを研究するというのを避けた。その代わりに、実験室や電話インタビューといった消毒され (sanitized) コントロール可能な状況を好み、日常生活とは無関係なデータを産出した。(Seiter 2004: 463)

視聴調査における質的調査の登場が1980年代だったと Lotz (2000) が述べているのはすでに確認したが、実は1960年代に早くもそのような

試みが見られる。1964年の論文集に収録された Blum の研究がそれである。これは、1961年に学会発表されており、調査はそれ以前に実施されたことになる。

この研究では、黒人労働者階級の家庭でテレビ視聴をしているところが観察調査された (アメリカのシカゴで40家族を対象; Blum 1964: 438)。その結果として、黒人視聴者がテレビ出演者とのあいだで、冗談を言う対話 (joking dialogue) をずっとしていることが観察された。具体的には、出演者をたしなめたり、おだてたり、その質問に直接回答したり、迫り来る危険について警告したり、ほめたりだったが、これらは、軽い調子でユーモラスになされていた。

このような行動は、黒人視聴者がメディア表象から距離を取ろうとするものだと Blum は解釈している。そして、その背景には、労働者階級の黒人が白人社会に対して持っている敵意があると指摘する (Blum 1964: 442)。

Blum の論文においては、詳細な調査結果は提示されていない。また、前段落のような解釈の根拠となった具体的なデータも見られない。そのため、結論をどのように受けとめるべきかについては注意を要する。ただし、彼が述べているように、それまで、「労働者階級の視聴者は、その認知過程が具体性を重視するものであり、対象にたいして情緒負荷的で個別的な志向をもつとされてきた」(1964: 437) という見方にたいして、十分な反証を提示するものと思われる。ただ数を数えるのではなく、状況を観察した成果がしっかりと現れているものである。

## 7 社会的事実への2種類のコミュニケーションアプローチ

社会学という学問の始祖とされるエミール・

デュルケームは、社会学の対象として「客観的な社会的事実」を指定したとエスノメソドロジーの創始者である Garfinkel は考えている (Rawls 2002; Garfinkel 2002)。

社会科学の2大データ収集技法は、インタビューと観察とである。データを収集しようとする社会学者には、社会の構成員に問いかけて言語による自己報告を引き出すか、自身で現象を直接観察するかを選択肢がある。

Garfinkel は、社会生活が独自の秩序を持つと指摘した。そうだとするならば、社会生活に参加しているひとにインタビューするということは、その参加から引き離すことになる。そして、問いかけるインタビュアーとの「インタビュー」という独自の秩序を持つ活動に参加させることになる。研究者が研究しようと思っている「社会生活」そのものから、一時的であれ切断してしまうことになる。

社会生活の「いまここ (here and now)」の相互作用と秩序にアプローチするのが観察法である。調査者がその場に居合わせて直接観察することもあるし、ビデオカメラやICレコーダで映像や音声記録を収集しそれを分析する「媒介観察」(南 2014: 77)もある。観察法を中核に据えるものとして、岡田は「観察社会学」を唱えている(岡田 2014)。岡田が依拠するエスノメソドロジーは、観察法を重視することで知られている。

社会生活が観察可能であることに注目し、探究の方法としての観察の利用に焦点を合わせるなら、エスノメソドロジーのアプローチが推奨されることになる。(Francis & Hester 2004=2014: 39)

観察法がいまここの相互作用と秩序にアプロ

チするものだとすれば、インタビュー法がアプローチするのはどんな対象と考えられるだろうか。インタビューそのものがひとつの活動であり、文脈である。そのため、インタビューという相互作用は、ある現象・対象「についてのもの」とならざるをえない。これは帰結の一種であり、相互作用分析をするうえでは致命的な制約である。

その一方で、「についてのもの」は、ひとが意識して言語化できるものならばほんなんでも対象とできるということになる。量的な評価を生み出す段階尺度もそのひとつである。以下では視聴後に回答された段階尺度の結果とそれについての発話を検討する。帰結としての量的評価と、相互作用を付き合わせてみるひとつの試みである。

## 8 段階尺度による評価

段階尺度は、評価や「態度」を得るためによく使われている。本研究の視聴学生は、映像作品について5段階で評定した。なお、第2部では「評価」と「評定」を以下のように区別する。5段階尺度のどこかを選ぶことを「評定」と呼ぶ。そして、「評価」は、評定することでもたらされる作品の良し悪しの判断を指すものとする。この区別によって、第1部での「評価」との一貫性が保持されると考える。

評定するのは、作品のでき、内容のおもしろさ、成城大学への興味、成城大学への進学意志、作品制作意欲、授業履修意欲、作品のテンポ、作品の工夫、作品の音響効果の9項目である。最後に自由記述欄があり、「感想・コメント」を書くようになっている。学生AとBの回答結果を記載したものを付図1に示した。

学生Aは、「興味をもった」と「音響効果が良い」という2項目で作品Cを高く評価する一方、

表2 より高く評価された作品の項目

	視聴作品		D作品	
	A	B	A	B
・作品としてよくできていた	-	B	-	-
・内容がおもしろかった	-	-	A	-
・(あなたが高校生としてこの作品を見たとき仮定して) 成城大学に大いに興味を持った	A	B	-	-
・(あなたが高校生としてこの作品を見たとき仮定して) 成城大学に入りたくなった	-	-	-	-
・このような映像作品を作りたくなった	-	-	-	-
・このような映像作品を作る授業を履修したくなった	-	-	-	B
・作品はテンポが良かった	-	-	-	B
・作品はよく工夫されていた	-	-	A	-
・作品の音響効果は良かった	A	B	-	-

「おもしろさ」と「工夫」で作品Dを高く評価していた。残り5項目は同じ評価だった。他方、学生Bは、「できがよい」、「興味をもった」と「音響効果が良い」の3項目で作品Cを高く、「授業を履修したくなった」と「テンポが良い」で作品Dを高く評価した。同じ評価は4項目だった(表2)。

2人の学生の評価を付き合わせると、「興味をもった」と「音響効果が良い」で作品Cを高く評価するのは一致していた。また、「入りたくなった」と「作りたくなった」は同じ評価でこれも一致していた。のこりの5項目のうち4項目でひとりが作品Dを高く評価し、「できがよい」だけでひとりが作品Cを高く評価した。

## 9 回答記入とインタビューの相互作用分析

### 9-1 段階尺度への回答場面

段階尺度の評定はひとつの数値であり、帰結である。だが、その数字がなにを意味しているかの解釈は単純明快といったものではない。本節で

は、この問題にたいするひとつの貢献として相互作用分析の結果を示す。取り上げるのは、作品Dの評定を記入している部分である。

#### 抜粋6 「よんかごしかつけない」

01 → A: hh (1.5) ふ: : んあたし¥基本的

02 → によんかごしかつけないhnh

03 → だhよhねh

04 B: おれ、さんよんご(だね)。に一問も

05 なくもねえなんかhh

06 C: [(あ)と

07 A: [ん: 作品のテン [ポ]

08 C: [あ]のちなみに

09 (.)このひと(.)あれです。

鼻歌を歌いながら学生Aは段階尺度に記入していたが、「あたし¥基本的によんかごしかつけないhnhだhよhねh」と発話する(01-03行の矢印)。記入開始からすこし経過しており、「作品のテンポ」と07行で言っているように、最初の6項目への回答が終わったあたりのものである。それまでの自分の回答を見直して、5段階の

「4か5」のみであると気づいてそのことを言っていると思われる。

学生Bは学生Aの発言を受けて、自身は「3, 4, 5」だけであり「2」はないと述べている(04-05行)。実は、作品Cの「履修しなくなった」項目に「2」と回答しているのだが、これはこの日のセッションではなく、前回視聴時の回答であり、この発話時には意識されなかったのだと思われる。

段階尺度への回答には、「癖」のようなものがあると言われている。たとえば、極端反応傾向(Extreme Response Style; ERS)と呼ばれる、項目内容とは独立に尺度の極端な段階を好んで選択するという、個人の反応嗜好性の存在が知られており、その研究もなされている(辻本 2003; 2006)。ここに見られるのは、否定的な評価を回避するという傾向であり、学生Bの「2一問もな」という発話はその表現として典型となるようなものである。

## 9-2 作品評価への不同意

抜粋6のこの場面は、作品Dについての評定を調査票に記入しているところである。だが、作品Cの制作者でありこのセッションの主宰者である学生Cが作品Dについての評価を開示したところから、ある種「インタビュー」の様相を呈する。

### 抜粋7 「えらばれたひと」

- 06 C: [(あ)と  
07 A: [ん: 作品のテン [ボ]  
08 C: [あ] のちなみに  
09 (.) このひと (.) あれです。  
10 A: >えらばれたひと<?=  
11 C: =えらばれたひと(です)  
12 A: うお: : : [そうなの

- 13 B: [へえ:  
14 そ: なんだ。  
15 A: Cちゃんのやつのほうがよかった(A  
はBのほうに顔を向ける))  
16 B: なんかね:  
17 A: hhh  
18 B: あんまり [かわんない  
19 A: [ぼそぼそ  
20 B: 気がするけど。  
21 A: ん. だってきれいだったじゃん  
22 B: ん:  
23 A: 音響  
24 C: そのひと, ○○  
25 A: =こちょっと流さないでね  
26 C: ○○大学の(.) はい  
27 A: えぬじー。

学生Cは、「あと、あの、ちなみに」と話し出す(06, 08-09行)。調査票への回答中であり、学生AとBが「ふたりで」しゃべっているという状況に口をはさむということを十分に自覚していることを示している。

そこで開示されたのは、作品Dが受験生向けオープンキャンパス上映作品に選ばれたというひとつの評価である。続くやりとりには、学生Aが授業の履修経験があるということがうかがえる。「このひと(.) あれです」という学生Cの発話(09行)は、なにも特定していない。それにたいして、「えらばれたひと」と学生Aは早口で候補を示し(10行)、学生Cは「えらばれたひと(です)」と間髪入れずに同じ表現を繰り返すことで確認している(11行)。

ここで前提とされているのは、授業の履修学生の作品からひとつをオープンキャンパス上映用を選ぶという手続きについての知識である。学生A

とBが履修した前年度の授業でも、学生Cが履修しているこの年度の授業においても同じ手続きが取られた。「あれ」が「えらばれた」ものであるとわかるということは、このような共通経験をもとに可能となっている。

そして、このニュースはある種の驚きをもって受けとめられる。学生Aの「うお：：」（12行）や学生Bの「へえ：」（13行）は驚きを示し、学生Aの「そうなの」（12行）は確認を求める疑問だが、意外性を示すことをしている。その上で、そのことへの不同意が示される。学生Aは、作品C「のほうがよかった」（15行）と言い切る。この発話をするときに、学生Aは回答を記入していた調査票から頭を上げて、隣に座っている学生Bへと顔をむける。

それにたいして、学生Bは、「あんまり変わらない気がするけど」（18, 20行）と応じる。学生Aほどではないが、それでも、作品Dが選ばれたということへの不同意を示している。学生Aはさらに、作品Cが作品Dより優れている点を「きれいだったじゃん」と主張する（21行）。これは、学生Bに同意を求めるものであり、学生Bは求められている同意を「ん：」（22行）と与える。

ここまで見てきたように、抜粋7のやりとりからは、作品Cを作品Dよりも高く評価しているのは学生Aであり、学生Bはほぼ同じとしているように思われる。これを、段階尺度の調査結果と付き合わせてみよう（付図1と表2）。

表2は、どちらかの作品を高く評価した項目と回答者がわかるようにしたものである。全体として、作品Cを高く評価した判断数と作品Dを高く評価した判断数がどちらも5つで同数だということがまず指摘できる。つぎに、視聴学生2人がともに優劣をつけたのが「（あなたが高校生としてこの作品を見たと仮定して）成城大学に大いに興

味を持った」と「作品の音響効果は良かった」であり、作品Cのほうを高く評価していた。残りの5つでは、視聴学生のひとりが差がある評価をしていた。

とくに抜粋7と関係するのは、「作品としてよくできていた」という最初の項目である。これについて、学生Aではなくて学生Bのほうが作品Cに高評価をあたえ、学生Aは同じ評価だったということである。この項目が総合評価をたずねているとすると、抜粋7のやりとりとは一貫しないということになる。

このような齟齬が生じた背景にはいろいろな点が考えられる。まず、抜粋7のような発話がインフォーマルなものであるということだ。これは、「ここちょっと流さないでね」、「エヌジー」（25, 27行）という学生Aの発話にも見ることができ、授業で選ばれた作品にある種「ケチをつける」ことであり、その不適切さを意識していることを示している。

これと関連することだが、そもそも、段階尺度を使って評定するということと、作品Dが選ばれたというニュースに応じるということとは、それぞれ別の活動であり、独自の秩序を持っているという考えもできる。学生Aのように「4か5しかつけない」という原則が段階尺度の評定では使われている。他方、眼前にいる学生Cへの配慮がやりとりにおいては関係してくる。両者の齟齬に矛盾を見いだして、それを「説明」しようとすることも可能であろう。その一方で、別々の活動が生み出していると考えてひとまず納得するという納め方もあるだろう。

## 10 映像作品視聴の相互作用分析の可能性

本論の第1部では、映像作品視聴時の視聴学生の発話の相互作用分析を行った。作品批評と、発

言批評と発言批判という類型を見だし、発話の宛先や想定する知識基盤の違いを見いだした。

第2部では、視聴後の段階尺度への回答場面を取り上げた。自己の評定性向の発話と、作品Dが選ばれたことに不同意を唱える発話を検討し、段階尺度評定という量的データを生み出す活動と、これとは別の活動の独自性が示唆されることになった。

合わせて、映像作品視聴の相互作用分析の可能性を示した。映像作品視聴は現代の社会生活の重要な一側面となっているわりに、その詳細についての経験的な科学的研究の蓄積はまだまだこれからである。今後の調査研究が大いに望まれる。

#### 注

\*本論文は、成城大学特別研究助成による研究プロジェクト「AV機器を利用した相互作用分析の適用可能性の検討」(2014-15年度)の研究成果である。調査に協力してくれた学生のみなさんに感謝する。本論で提示した録画断片は、ビデオデータセッション研究会@成城(2016年1月10日・2月20日)で提示し、多くの貴重な示唆とコメントを受けた。記して感謝する。

- 1) 引用文中の二重括弧(())は、南による注記である。
- 2) 「視聴行動」などと特定しないとすぐ上のところで述べた直後に、この表現を使うのは一貫していないような印象を与えるであろう。しかし、学生に指示をするときの便宜を考えて、授業においては「視聴行動調査」と呼んでいた。
- 3) ただし、付図1では、段階尺度の段階のところに学生AとBの回答結果を掲載している。実際に使用した調査票では、ここには「5」から「1」までの数字が並んで丸で囲む形式となっている。
- 4) 「発言」と「発話」は区別されないで使用されることも多い。本論においては、便宜上、映像作品内での登場学生のもを「発言」、視聴時

の視聴学生のもを「発話」と呼びわけることにする。

- 5) 原文では、項目に番号は付いていない。南が付した。
- 6) 抜粋中の「P」は映像のことである。(())は南による注記である。映像については、その概要を記述している。そのほかの凡例は以下である。

[ 複数の参加者の発する音声が重なり始めている時点は、角括弧([ ])によって示される。

= 2つの発話が途切れなく密着していることは、等号(=)で示される。

( ) 聞き取り不可能な箇所は、( )で示される。空白の大きさは、聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している。

(言葉) 聞き取りが確定できないときは、当該文字列が( )で括られる。

(m. n) 音声途絶えている状態があるときは、その秒数がほぼ0.2秒ごとに( )内に示される。

(.) 0.2秒以下の短い沈黙は、( )内にピリオドを打った記号、つまり(.)という記号によって示される。

言葉 : : 直前の音が延ばされていることは、コロンの数で示される。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。

h 呼気音はhで示される。hの数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。

言(h) 呼気音の記号は、笑いを表すのにも用いられる。とくに笑いながら発話が産出されるとき、そのことは、呼気を伴う音のあとに(h)を挟むことで示される。

¥ ¥ 発話が笑いながらなされているわけではないけれど、笑い声でなされているということもある。そのときは、当該

箇所を $\Sigma$ で囲む。

> < 発話のスピードが目立って速くなる部分は、左聞きの不平等と右聞きの不平等で囲まれる。

( ) 発言の要約や、その他の注記は二重括弧で囲まれる。

- 7) 「評価 (evaluation)」と「アセスメント (assessment)」の異同はなかなかやっかいな問題である。それぞれ対応する英語の違いもある。うえに、日本語の訳語が日本独自の意味を持っているように思われるからだ。日常生活レベルでは「アセスメント」とし、「教育評価」などの「測定」要素が意識されるときには「評価」といったおおまかな対比ができるかと考えられる。本論では、互換的に両方を使用している。
- 8) 帰結を数値で示すものとして、学校でのテストがある。小学校で実施されている推論テストを研究した結果について、Cicourel は以下のように述べている。

このテストは、教師やテスト実施者が推論能力について独立した判断をすることを可能としている。なぜなら、子どもの解答を表象している数表のみが利用可能であるからだ。子どもの解答は異なる文化的経験を基にしているかもしれないが、テストはそのような違いを明らかにすることはできない。子どものコンピテンスを理解するには、すくなくとも、テスト結果を産出する相互作用場面の複合性に気づくことが必要である。(Cicourel 1974: 14)

エスノメソドロジストの Zemel と Koschmann は同様の考えを「学習 (learning)」について表明している。以下の引用でいう「評価査定という間接的な手段」は、帰結として捉えて測定することの言い換えであると理解できる。

学習というトピックは、概して、エスノメソ

ドロジカルな知識に基づく研究の踏み込んではいけない聖域として取り扱われてきた。それには十分な理由がある。心理学者や教育専門家によって研究されるものとしての学習は、評価査定 (appraisal) という間接的な手段によってのみ利用可能なものであるからだ。(Zemel & Koschmann 2014: 163)

- 9) 石山と黄 (2016) は、テレビの「視聴質」を測定する尺度を開発している。テレビ視聴の調査研究史の紹介もある。

### 引用文献

- Blum, A. 1964. Lower-class Negro television spectators: The concept of pseudo-jovial scepticism. In A. B. Shostak et al. eds. *Blue-collar world: Studies of the American worker*. Prentice-Hall. 429-35.
- Cicourel, Aaron V. 1974. Introduction. In Cicourel et al. *Language use and school performance*. Academic Press. 1-16.
- Francis, David, & Hester, Stephen. 2004. *An invitation to ethnomethodology: Language, society and interaction*. Sage. (= デイヴィッド・フランシス; スティーヴン・ヘスター. 2014. 『エスノメソドロロジーへの招待: 言語・社会・相互行為』中河 伸俊; 岡田 光弘; 是永 論; 小宮 友根訳. ナカニシヤ出版.)
- Garfinkel, Harold. 2002. *Ethnomethodology's program: Working out Durkheim's aphorism*. Rowman & Littlefield.
- Goffman, Erving. 1963. *Behavior in public places: Notes on the social organization of gatherings*. Free Press.
- Goffman, Erving. 1974. *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Harvard University Press.
- Heath, Christian, Hindmarsh, Jon, & Luff, Paul. 2010. *Video in qualitative research: Analysing social*

- interaction in everyday life*. Sage.
- 石山 玲子；黄 允一. 2016. 「視聴質」尺度による番組評価の試み. 『成城文藝』 237・238 : 220-201.
- Katz, E., & Lazarsfeld, P. F. 1955. *Personal influence: The part played by people in the flow of mass communications*. Free Press. (= E. カッツ；P. F. ラザースフェルド. 1965. 『パーソナル・インフルエンシス：オピニオンリーダーと人びとの意思決定』竹内 郁郎訳. 培風館.)
- Lotz, Amanda D. 2000. Assessing qualitative television audience research: Incorporating feminist and anthropological theoretical innovation. *Communication Theory* 10: 447-467.
- 南 保輔. 2014. 観察. 社会調査協会編『社会調査事典』丸善. 76-77.
- NHK. 1994. 新方式導入で視聴率に激変？（視聴率と視聴質第1回）. 『メディアは今』NHK教育テレビ1994年10月26日（水）8:00 - 8:45 p.m.
- NHK放送文化研究所. 2016. 『2015年国民生活時間調査報告書』NHK放送文化研究所.
- 西阪 仰. 1997. 『相互行為分析という視点：文化と心の社会学的記述』金子書房.
- 岡田 光弘. 2014. スポーツ実践における「観察」：観察社会学による身体教育のフィールドワーク. 『成城大学共通教育論集』 7: 97-107.
- Pomerantz, Anita. 1984. Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson et al. eds. *Structures of social action: Studies in conversation analysis*. Cambridge University Press. 57-101.
- Rawls, Anne Warfield. 2002. Editor's Introduction. Rawls ed. *Ethnomethodology's program: Working out Durkheim's aphorism*. Rowman & Littlefield. 1-64.
- Seiter, Ellen. 2004. Qualitative audience research. In R. C. Allen et al. eds. *The television studies reader*. Routledge. 461-478.
- 辻本 英雄. 2003. 極端反応傾向と開放性・遊戯性・外向性. 『パーソナリティ研究』 12: 14-26.
- 辻本 英雄. 2006. 極端反応傾向と個人主義関連特性との関連. 『パーソナリティ研究』 14: 293-304.
- Zemel, Alan, & Koschmann, Timothy. 2014. 'Put your fingers right in here': Learnability and instructed experience. *Discourse Studies* 16: 163-183.

## 付図1 学生AとBの調査票への回答

## 映像作品を視聴して

あなた自身について教えてください。

年齢： \_\_\_\_\_ 歳                      性： 女      男

学部： 文芸   経済   法   社イノ                      学年： \_\_\_\_\_ 年

成城大学学生でない場合の職業： \_\_\_\_\_

1つめの作品について、以下の項目の内容は、どの程度あてはまると思いますか。それぞれの項目について、あてはまると思う数字をまるで囲んでください。

- 5 あてはまる  
4 ややあてはまる  
3 どちらでもない  
2 あまりあてはまらない  
1 あてはまらない

	視聴作品		D作品	
	A	B	A	B
・ 作品としてよくできていた	4	5	4	4
・ 内容がおもしろかった	4	4	5	4
・ (あなたが高校生としてこの作品を見たとき仮定して) 成城大学に大いに興味を持った	5	4	4	3
・ (あなたが高校生としてこの作品を見たとき仮定して) 成城大学に入りたくなった	4	4	4	4
・ このような映像作品を作りたくなった	4	5	4	5
・ このような映像作品を作る授業を履修したくなった	4	2	4	4
・ 作品はテンポが良かった	4	3	4	4
・ 作品はよく工夫されていた	4	4	5	4
・ 作品の音響効果は良かった	5	5	4	4

感想・コメントを聞く。

## 【C作品】

- A：映像と音が良かった。  
    イントロがかっこよかった。  
    それぞれとってる場所が工夫されていておもしろかった。  
B：映像がとてもキレイで音声も聞きとりやすかった。  
    BGMと声のバランスもしっかりととれていたと思う。

## 【D作品】

- A：いろんな学科の人にインタビューしていてよかった。  
    回答者が個性的であきなかった。  
B：テロップなどが出るタイミングがよく、内容がわかりやすかったと思う。

## A Micro-Ethnographic Study of Audiences: Application of Interaction Analysis Utilizing Audio-Visual Equipment

Yasusuke Minami (Seijo University)  
yminami@seijo.ac.jp

### ABSTRACT

Recordings of two students watching a short video clip were examined with interaction analysis, which is informed by ethnomethodology and conversation analysis.

The utterances of two students were examined in terms of their sequential organization and addresses. The utterances were classified into two groups: those concerning the video clip as a product and those concerning the remarks the featured people make within the clip. The former group of one student's utterances are addressed to the other student. The latter group of the utterances are either addressed to the other student or to the featured people within the clip. The other student addressed with the utterances responded by agreeing or disagreeing, while they responded to the utterances addressed to the featured people with acknowledgement and laughing.

In the second part of the article, quantitative evaluation data obtained with Likert scales were compared with what the watching and evaluating students said while responding to the scales. The two kinds of data appear to contradict each other. It was argued that the quantitative data should be regarded as consequences of interactional decision making. The interaction analysis of the responding process is a promising area of further investigation.

**KEYWORDS:** audiences, interaction analysis, evaluation/assessment, utterance criticism, ethnomethodology and conversation analysis